



### 〈報告〉「大刀剣市2019」実行委員会 事前説明会を開催

今年の「大刀剣市」事前説明会が八月二十三日の組合交換会終了後、東京美術倶楽部で開催されました。

事前説明会は、十一月一日から三日間開催される今年の大刀剣市に出店する七十三店舗が、一堂に集まる唯一の機会です。大刀剣市実行委員会が、出店規約やカタログ・会場・新聞広告・カード利用など催事に関する変更点や諸注意などについて説明し、出店者からの質問にも丁寧に対応して、大刀剣市が無事に開催できるように確

### カタログ制作の現場から

「大刀剣市」図録(カタログ)編集委員会から、出店者の皆さまにお知らせとお願いです。

今回は「カタログはいつ届くのか」といった問い合わせが組合事務局へ相次いだと聞いています。これには、実行委員会の立ち上げが新執行部の確立に伴って例年より若干遅れたこと、さらに掲載内容の正確性を期し、全ての出店者に郵送し、校正をしていたことが影響しました。編集委員会はできるだけ納期を短縮しようと努力しましたが、相応の時間を要してしまいました。



より良いカタログを目指しての作業風景

認を行います。

同実行委員会としては、任命された六月以降、今年の大刀剣市をいかにして成功させるか協議を重ね、努めている状況を出店者に報告し、意見を伺う場となります。各実行委員は、ともしれば自分の販売を二の次にして、あくまでボランティアとして大刀剣市のために時間を費やしています。

恒例の一大企画を限られた条件の下で開催するために、実行委員会は経験と知識を兼ね備えたベテランを中核に据え、さらに後進が

本カタログの完成には、なかなか複雑な制作工程を経ます。

- ① 出店申込受付、② 掲載作品の確定・撮影、③ 掲載順の確定と台割り、④ 原稿作成・レイアウト、⑤ 入稿、⑥ 初校、⑦ 再校、⑧ 色校、⑨ 念校、⑩ 下版、⑪ 印刷・製本、⑫ 納品。
- 私たちはそれぞれの工程において、誤りの生じないように、より良い品質が得られるように気を配って作業しています。
- 現在は遠方の出店者に配慮し、いわゆる自撮り写真やデータでの入稿も可能ですが、組合で撮影したものとの間にできるだけ不具合が生じないように努めています。

しかし、撮影環境と撮影手法の違いにより、必ずしも同調させるのが困難なものもあります。例えば、黒色系の帯が黒いバックで撮影された場合、写真を切り抜いてバックを差し替えなくてはなりません。その画像加工には余分な手間と費用が発生します。少しでも工夫していただければ、完成度

育つように若手を随所に登用し、継続性を意識した編成とされています。その結果、特定の組合員に頼る実情となつていきます。

一方で、公平性の観点からも、実行委員会を出店者全員参加型にするかや交代制、輪番制にするべきという意見があります。

しかし現実的には、地理的な問題や個々のさまざまな事情があって、現状に代わる妙案は実現を見ていません。事前説明会に要するのは、わずか一時間程度です。しかし、この一時間は、出店者全員が勢揃いして、大刀剣市というビッグイベントが縁の下力持ちにより支えられていることをあらためて認識

はさらに高まると思います。

次に、編集委員会からお願い事項を記します。併せて、やや専門的になりますが、データ入稿については次のような要望も印刷現場から上がっています。

- ① 刀身の本体画像が天地二〇〇ミリ時に最低解像度が三五〇dpiあるように作成してください。
- ② 刀装具についても、本体が原寸時に最低解像度が三五〇dpiあるようにデータ作成願います。
- ③ 一カットに数点の掲載品を入れると、その後のレイアウトの作業に支障が生じたり、印刷解像度が不足する場合がありますので、一カット一点を基本としてください。

し、出席者全員が成功に向けての思いや情報を共有する場、一丸となる大事な機会です。来年こそは一人の欠席者も出さずに全出店者が顔を揃え、一つにまとまり、強固なスクラムを組む場になることを願っています。



ほとんどの出店者が出席した事前説明会

### ある刀屋の履書

飯田慶久 (飯田高遠堂)

#### ◆第四回 徳川家の刀剣

平成九年十月、東京国立博物館で特別展「日本のかたな 鉄のわざと武のこころ」が開催された。国宝・重文・重宝などの名刀を一堂に展示する戦後最大級の展覧であった。

開会に先駆けて開かれた内覧会の席上、伊予西条松平様にお会いした。その折、松平様が「飯田さんはお近くにお住まいの徳川様を「存じかな」とおっしゃるので、「存じ上げませんが」と申し上げると、その場でご紹介いただくこととなった。本紙第47号に記したように、松平様とは九鬼正宗の一件以来親しくさせていただいていたが、徳川Y S様に「こちらは飯田高遠堂の社長で、私が絶大な信頼を寄せている男なので、どうかよろしくお見知りおきを」と紹介されたのは恐縮した。

それから数カ月後、銀座松坂屋で当店が展示即売会を開催した時、会場に徳川Y S様がお見えになった。お父上は昭和天皇にお仕えし、宮内庁侍従長を務められた徳川義寛様で、尾張徳川家の御分家にご当り。当日は慌ただしかったこともあり、私は初め、うかつにお持ちになった目貫や小柄五、六点を見てほしいとのこと、拝見すると、今作られたかと思えるほど保存のいいものばかりだった。「お宅様の品物はどれも保存状態がよろしいですね」と言ってお顔を見て気がついた。

私が品物を拝見している間、徳川様はずっとお立ちになっておられたのである。私は「大変失礼しました。徳川様でございますか」と謝罪し、ご説明をさせていただいた。その際、ご所蔵の刀剣を評価鑑定することを依頼された。ご自宅に伺ったのは、それから数週間後だった。出してもらったのは保昌貞吉の剣と相模守政常の槍である。「どちらの方が価値が高いですか」と問われ、剣の方を挙げると、それぞれの評価についても意見を求められた。

私は剣が重要刀剣に指定されるクラスと判断し、「二百万円ぐらいでしょうか」と申し上げ、槍は四十〜五十万円の相場をお伝えした。「それでは、槍の方はお持ち帰りください」と言われ、頂いてきた。帰社してからも剣のことが気になる、いろいろ調べてみた。すると『日本刀重要美術品全集』に掲載されているではないか。私はすぐに電話をし、「先ほどは大変失礼しました。保昌貞吉の剣は重美に認定されており、一千万円以上する名品です」とご説明した。さらに「徳川家康遺品集」にも紹介されていて、家康公ゆかりの一振であることが判明した。

徳川様は「家康にまつわる品は今の当家にはこの剣以外にはないので、家宝として大事に伝えていきます」とおっしゃられていた。その後しばらくして、平成十六年のころ、刀を見てほしいとの依頼を受け、再び徳川様のご自宅に伺う機会があった。拝見した太刀は優美な姿で身幅広く、重ねも厚く、ただならぬ名刀であることはすぐにわかった。しかし、残念なことに銘の部分が朽ちていて、「国俊」と見えるが判然としない。うかつなことは言えないと思う、「私の鑑識力では判断がつかないので、刀剣博物館で専門家に見ていただければい

がでしょうか」と申し上げた。その場で刀博の田野道宏先生に連絡すると「おいでください」とのことだったので、早速、徳川様とともに太刀を持参した。

田野道宏先生の鑑定は「二字国俊の重文級の名刀」とのこと、徳川様も大いに喜ばれた。それから数年後、この太刀は縁あって私が扱わせていただいた。ほかにも一文字の太刀など数点をお譲りいただいたが、いずれも古鞘に蔵番のある尾張徳川家伝来の刀だった。

その後、あるパーティー会場で水戸徳川家の徳川Y H様にお目にかかった。先ごろまで靖国神社の宮司を務められた方である。「飯田さんは私を知らないだろうが、私はよく知っているんですよ」とおっしゃり、「徳川Y Sからあなたのことばよく聞いているし、われわれ一族の集まりで刀の話になると必ずあなたの話題になるんだよ」と、驚くほどの話をされた。

ある時、徳川美術館の展覧会に私どもから刀をお貸ししたことがあり、学芸員の方が返却に見えられるとのことだったが、実際には館長の徳川Y T様が「一緒に来た。徳川美術館は名古屋にあり、尾張徳川家が設立した公益財団法人徳川黎明会が運営している。Y T様は尾張徳川家の、当主であり、実は当店から徒歩四、五分の所にお住まいなのである。」

「先日、親戚の集まりがあった時、飯田さんの話になり、叔父・叔母たちがみんな飯田さんを知っているのに、近くに住む私が知らなかったとは大変失礼した」と恐縮されておられたが、ご当主の先代も先々代も存じ上げていたのに、私の方こそご挨拶が遅れたことをお詫言した。

それもこれも、九鬼正宗から始まった縁である。そして、徳川家との縁もまた続くのである。

### NEWS & TOPICS 秋葉神社「日本刀公開講座」に七十余人が参加

浜松刀剣愛好会(御室健一郎会長)と浜松市は九月二十九日、同市天竜区春野町の秋葉山本宮秋葉神社本社で「日本刀入門公開講座」を開催した。参加者は七十八人。左野美術館の渡邊妙子理事長が講師を務め、「日本刀の美と技」

と題する講演では「鉄を磨き上げることでできる刀の光を愛でるといふ楽しみが日本人によって見いだされた」と述べられた。その後、参加者は同神社が所蔵する鎌倉から江戸時代にかけての日本刀六振を鑑賞した。

刀剣業界の情報紙である『刀剣界』では、記事を募集しています。ニュースや催事情報、イベント・レポート、ブック・レビュー、随筆・意見・感想など、何でも結構です。写真も添えてください。組合員・賛助会員以外の方も歓迎です。ただし、採否は編集委員会に諮り、紙面の関係で編集させていただくことがあります。

### 「登録証問題」を考える ②

#### 事例 31 対応の違い

銘文などの記載に間違いがなくとも、登録月日だけが異なる例がある。昭和二十六年から三十年代に交付された登録証にまあるものである。今回、越前守国次の槍の登録証の内容確認をしたところ、日付が異なるという回答を得た。この事例は少なくない。問題は、その時の対応が都道府県によってまちまちということである。東京都は「日付が異なりますが、古い登録証にはよくありますから」「コピーを添えていただければ、所有者変更届出書を受理します」という回答をすることが多い。ところが、東京都以外の教育委員会の場合、日付が異なるから受理できません、と言われることが多々ある。

兼友の平造協差は、昭和二十六年大阪府で交付されていた。内容は一致するが、日付が異なるので所有者変更届出書は受理しませんでした、と言った。これなど、東京都であれば、前述したような柔軟な対応をするはずである。が、大阪府はそうではなかった。

大阪府は以前にも同じような事例があった。昭和二十六年登録で登録月日が異なっている。もちろん、どう異なっているかは教えてくれないし、所有者変更届出も受理しない。それで東京都に資料を送ってもらって現物を審査し、また大阪に資料を送付し、ようやく訂正交付となった。実に一か月半ほどの手間暇がかかったことを本欄で紹介した。初期の登録証の日付の記載間違いについて、東京都のように柔軟な対応をすることは少ない。

東京都でも、日付の違いで現物確認を求められたことがあった。買取希望で持参されたその協差は、発見届から登録までを、現所所有者のお父上がなさったのだという。一応、内容確認をしたところ、日付が異なるという回答。しかも現物確認が必要になるという。これは初期登録ではなかったのかもしれない。が、登録の事情はかなり明確であった。それでも現物確認を求められた。

#### 事例 32 登録証の種類

奈良県の登録証の付された康継の協差が買い取り相談で持ち込まれた。奈良県教育委員会に電話をかけて、問い合わせたところ、長さ・反り・銘文・登録年月日、すべて大丈夫であった。ただ、一方の問題があった。この登録証は、協差とすべきところを「刀」と記載しているのである。

私「内容は合っていますね。しかしこれ、協差ではなく、刀として書かれていますね」  
担当者「はい、登録台帳はそのようになっていますね。は？」  
私「でも、これ、協差ですよね。刃長は一尺六寸六分だし、ねえ」  
担当者「えー、さー、どうでしょう。ともあれ、台帳では刀となっていますので」

この担当者は、刀・脇差・短刀の種別の定義がわかっていないのである。これ以上は話をしても無駄だなあ、と思いつつ、受話器を置いた。奈良県の昭和二十六年、刀：何となく以前に見たような気がして調べてみると、あった！  
刃長一尺なので、脇差と記されているところだが、「刀」と書かれている。同年月日で、同筆である。

同じ日に、同じ人により登録証が書かれたことは歴然である。この人は、刀・脇差・短刀、その日に登録された刀剣のあらゆる登録証の種類を「刀」と書いてしまったのだろうか。その日だけ、体調不良で間違えてしまったのだろうか。それともそういう間違いを数か月、数年にわたって繰り返していたのだろうか。

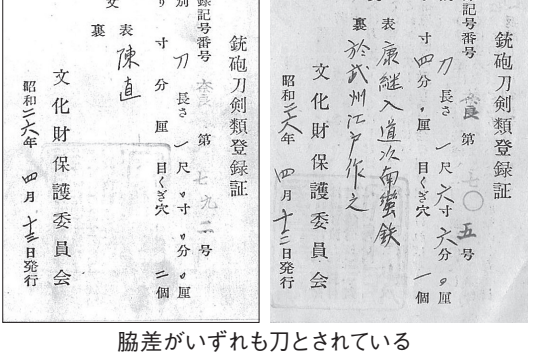
となると、今後、奈良県発行の同様の登録証にお目

にかかる可能性があるのかもしれない。困ったことである。「昔の登録証にはよく間違いがありますから」という。が、現在、奈良県で銃砲刀剣類登録の事務に関わっている人は、先に示した協差康継の登録証について、何ら疑念を持たなかった。部署の配置で、たまたま登録行政に関わるようになったのであり、刀に全く関心はないのだろう。それでも種別くらいは理解しておく必要はあるのではなからうか。

令和元年の現在も新規に刀が登録されているはずだが、その際、脇差や短刀に対して、「刀」と記載されてしまったら、そもそも種別について理解がなければ、そのまま発行されてしまうであろう。こんな単純な間違いであっても、登録証の記載内容を正すならば、型通りの手続きを要するはずである。①現物確認依頼書を奈良県が送付。②受け取ったら、必要事項を書き込んで返送。③東京都から登録審査会の案内を受け取る。④都庁で現物確認。⑤東京都から奈良県へ報告書。⑥奈良県が訂正交付。

一連の手続きが完了するのにかかる場合によっては、一カ月から一カ月半かかるのではなからうか。何とも残念な話ではある。

（登録証問題研究会）



脇差がいずれも刀とされている

### 甲冑の話 ④

(二社)日本甲冑武具研究保存会

今回は横浜市の「馬の博物館」で十月五日(土)から十二月八日(日)まで開催されている企画展「名馬と武将」を紹介しよう。

展示品は絵巻物・文書類・馬具・甲冑を中心として、鎌倉時代から江戸時代にかけての武士たちと馬との関係性を紹介する内容となっています。甲冑は特に至町時代の後期から桃山時代の胴鏡・兜が展示されています。

小田原北条氏一門の北条氏規(北条氏康四男、一五四五〜一六〇〇年)所用との伝来がある「本小札紫糸素懸威腹巻」(小田原城天守閣蔵)をはじめ、日本甲冑武具研究保存会の会員が所蔵している甲冑・馬具(鎧や鞍)も展示されています。

兜は東国で製作されたもの(相州鉢、別称小田原鉢)が多めかと思えます。馬具についても戦国時代に製作された鞍を中心に展示されており、普段まとめて展示されることが少ないものです。

また今回の展示は、甲冑をはじめ武具類の重さに着目している点も特徴で、展示解説に重量が記載されています。当時の武装階級の



### 刀にも触れる… 明治日本の世界遺産を訪ねるツアー

JR九州は九州鉄道の開業百三十周年を記念し、人気のD&S列車「A列車で行こう」を使って、時開業した五駅の駅長と一緒に明治日本の世界遺産等を巡る「九州鉄道と明治日本の世界遺産を訪ねる」日帰りツアーを実施する。

九州鉄道は九州初の鉄道として明治二十二年十二月十一日に博多駅から千歳川仮停車場まで開業。今年には百三十周年に当たる。

今回のツアーは、当時開業した博多駅・南福岡駅(雑餉隈駅)・二日市駅・原田駅・鳥栖駅の駅長と一緒に、明治日本の世界遺産等を巡る特別なツアーとなる。博多駅から大牟田駅・荒尾駅まで特急「A列車で行こう」で往復するほか、その間、郷土刀の鬼塚吉国を鑑賞、チャーター船に乗って三池港を海上から特別見学、宮原坑から万田坑までの三池炭鉱専用鉄道



JR九州の「A列車で行こう」

**日本刀 販売 買取 委託**

**e-sword** (株) e-sword (イーソード) 平子誠之

〒350-1115 埼玉県川越市野田町 1-4-19 1F  
TEL 049-246-6622 FAX 049-246-1407

<http://www.e-sword.jp>

日本刀 イーソード 検索

mail: info@e-sword.jp

**「錦包藤巻太刀・腰刀」復元プロジェクト始動**

敵島神社所蔵の「錦包藤巻太刀・腰刀」(重要文化財)を復元し、奉納するプロジェクトがクラウドファンディングを活用して開始された。期限は12月28日、目標金額は250万円。

外装の錦が剥落しているだけでなく、鐔も金具も失われた状態を憂い、三上貞直刀匠が錦研究家や染織専門家・研師・鞆師・白銀師・金工・柄巻師らの協力の下に刀身と外装の復元に挑戦する。詳細と支援の申し込みは下記まで。

<https://casanell.com/projects/view/13>

人たちがどのようなものを身にまとい、あるいは使用して戦場に赴いたかをよりリアルティをもって想像させてくれるので、見学する人にとっては大変興味深い内容になっているのではないのでしょうか。

常設展では日本人と馬の関わりについてさまざまな情報を通史で知ることが出来る「馬の博物館」ならでの展示となっております。これもなかなか見る機会のないものです。この機会にぜひ足を運んでみて下さい。

馬の博物館 Ⅱ-231-085  
3 神奈川県横浜市中央区根岸台1-3 公益財団法人馬事文化財団  
〒045-1662-1758  
<https://www.bajimusejrao.ne.jp/>

(一般社団法人日本甲冑武具研究保存会 評議員・佐々木亮)

# 刀 劍 界

## 質問箱 第三回

回答者 ● 冥賀 吉也



### 「古」極めの定義と特徴

①古伯耆極めの刀剣は平安時代後期～鎌倉時代初期と言われ、古吉井は鎌倉末期から南北朝期と言われています。同じ「古」が付くのに、なぜ時代が異なるのですか。

②古某の付いている流派等について、その特徴を詳しく教えてください。

①については、おのおのの流派などの「祖」と言われる刀工の出現の時期が異なっているためです。

②については、生ぶ無銘の太刀や大磨上げ無銘の刀を極める場合、刀工の個性で極めることが難しい時に、何時代のどの国のどの流派に属するかが判断できれば、古某で極めることが多いものです。

古い時代の刀剣には特に在銘品が少ないことも、理由の一つです。次に、古某極めのものとはたくさんありますが、代表的な極めを挙げてみると、前述の古伯耆や古千手院、古京物、古波平、古備前、古青江、古一文字と続き、古宇多、古三原、古吉井、古金剛兵衛、さらにはやや時代の下った古水田なども見られます。

それでは、おのおのについて詳しく見てみましょう。

#### ■古伯耆

古伯耆とは、伯耆国において平安時代後期から鎌倉時代初期にかけて活躍した刀工群およびその作刀を指す。安綱が最も有名で、その子と伝える大原真守、一門の有綱・貞綱・安家・真景などがある。作風については、姿は同時代共通のものであるが、身幅の割に鑄がやや高く、鑄幅が狭い。加えて

平肉のよへついた造り込みが特徴ともいえる。地鉄は板目肌立ち、地沸がつき、地斑、地景を交えて、地鉄が黒みを帯びている。

刃文は小沸出来にて、匂口がうるみ心に刃肌が立って、金筋・砂流しなどがしきりにかかり、ところどころに小互の目や小湾れが独立して交じり、加えて区際に腰刃とか焼き落しのある点が古備前とは異なる。帽子は焼き詰めか沸崩れて火焔が多い。

#### ■古京物

平安時代末期から鎌倉時代初期にかけて、京には宗近・吉家の三条派、包永・国永らの五条派、また久国・国安らの初期粟田口派の刀工たちがいた。古京物極めの太刀類は、にわかには流派・個性を指摘し得ないまでも、鎌倉初期を大きく下らぬ古い京物と鑑することができるといえる。

作風は、優美で古典的な形状に、地鉄は小板目肌よく詰み、地沸微塵に厚くつき、細かな地景入り沸映り立つ精美な肌合いとなる。刃文は直調にさまざまな小模様を乱れを交え、匂口明るく小沸のよくついた古雅な格調のあるものである。

#### ■古備前

古備前とは、平安時代末期から鎌倉時代初期にかけて備前国に出現した刀工群を言う。同派の中では友成と正恒が最も有名で、特に正恒系には在銘作が多く、恒光・利恒・包平・吉包・助包・光忠・景安・信房など多くの名工が存在した。

古備前の一般的な作風は、生ぶの姿はやや長寸にて腰反り強く踏ん張りあり、先に行つて伏し心を見せ小切先に結び、優美な太刀姿が多い。地鉄は板目に地沸つき、

地景交じり乱れ映り立つ。刃文は小乱れ・小丁子・互の目が交じり、沸つき、金筋のかかるもので、総じて華やかに乱れるものは少なく、直刃調か浅い湾れを基調とするのが通例であり、総じて古雅である。

#### ■古一文字

福岡一文字は備前国福岡庄において鎌倉時代初期から中期まで栄えた。その中で、則宗をはじめとして助宗・宗吉・成宗・宗忠・重久・貞真など鎌倉初期に活躍した刀工たちを、別に古一文字と称している。

作風は、古備前に比して丁子が目立って整い、映りが鮮明となるが、鎌倉中期の福岡一文字ほど華やかではなく、古備前同様に小沸出来のものである。

#### ■古青江

備中国は古くから鉄の産地として知られ、青江派の刀工は同国の子位や万寿の地で作刀した。青江とは在地の地名である。

『日本古刀史』によると、古青江とは平安最末期から鎌倉初期までのものを一括して言うところであるが、現在では平安末期から鎌倉中期ごろまでのものとされている。

古青江の名だたる刀工としては守次・貞次・恒次・次家・包次・為次・康次・俊次・助次・次忠などがおり、「次」を通字としている。なお、守次・貞次・恒次には名跡を襲うものが数代ある。

作風は、小板目がよく詰まって地鉄のきれいなものと、縮細肌と言つてチリチリと肌立ち、澄肌と言つて一種の地斑があり黒みのあるものがあって、後者に特色を見る。刃文は小沸のついた直刃仕立てで、歯の中に小乱れ・小足の入るものがあり、古備前に比して地刃ともに地味で渋い感じのものである。

なお、銘は佩裏に切り、鑄目が大筋違である点も、古備前とは相違する。

#### ■古波平

平安時代後期、正国なる刀工が大和国から薩摩国谷山郡波平の地に來住して波平派の祖となったと伝え、その子を行安といひ、その流れは幕末にまで及んでいる。同派の中でも南北朝期を下らぬ刀工およびその作刀を総称し、古波平と言つ。刀工としては行安・家安・久安などが挙げられる。

波平の作風はすこぶる保守的であり、時代が下っても平安後期の太刀物の特徴を継承し、これに九州物の特徴を加味した独特の作風としている。

鑄高く、板目が総体に流れて柱がかり、地鉄はネットリとして軟らかみを帯び、鉄が白けている。刃文は細直刃調を主調にするみ心を見せ、小沸つき、総体にほつれて匂口は沈み心となる。鍔元を焼き落すと特徴があり、帽子は焼き詰め二重刃がかかる。

#### ■古宇多

宇多派は鎌倉時代末期の古入道国光を祖として、南北朝期に国房・国宗・国次らの刀工がおり、同名相次いで室町時代末期にわたり越中国で栄えている。このうち、南北朝時代を下らぬ作品を古宇多と汎称している。しかし、南北朝期の在銘品はほとんどなく、無銘極めのものが大半を占める。

同派は大和国宇陀郡の出身であることから自然、大和気質の強いものが多く見られるが、同時に越中の先達の則重や江に倣ったと思われる相州伝風のものも存在する。

古宇多極めの作風は、姿は南北朝期の延文・貞治形が多く、地鉄は板目に歪流れ肌交じり、やや肌立つ鍛えに地沸厚くつき、太い地景がしきりに入り、鉄色黒みを帯び、肌目が粕立つところがある。刃文は中直刃調に沸がよくつき、刃縁がしきりにほつれ、金筋・

砂流しが激しくかかり、粗めのつづらな沸がつき、匂口は沈み心となる。

大和伝・相州伝を加味し、加えて黒みを帯びた地鉄には北国気質も見られる作風である。

#### ■古三原

備後国三原派は鎌倉時代末期に興り、以後、室町時代末期に至るまで繁栄した。一派のうち、鎌倉時代末期から南北朝期にかけてのものを古三原と汎称しており、代表刀工として正家・正広が挙げられる。

三原の地は中央の社寺の荘園が多くあった関係で、大和気質の作風が多く見られるが、まれに段映りの現れた隣国の青江に似た作風

も見られる。古三原極めの作風は、姿の点では南北朝前期ごろのものと同文・貞治ごろのもの二様があるが、共に鑄地の高い造り込みである。

地刃の点では大和本国のものに比べて沸の弱いのが一般的で、鍛えは白け心があり、ままだ板目の肌合いの中に歪が目立って肌立ち、刃文は直刃にて匂口が締まり心となり刃縁が盛んにほつれ、ところどころ食い違い刃を見せ、匂口は沈み心となる。帽子は穩やかとなり、直ぐに小丸にて返りが長くなるのも特徴の一つである。

#### ■古吉井

備前吉井派は鎌倉時代後期に為則を祖として始まると伝え、鎌倉

末期から室町時代にわたって繁栄した。同派のうち、南北朝期までの作を特に古吉井と称し、室町期のものは単に吉井と呼んで区別している。古吉井の代表刀工として景則・真則・則繩・盛則らがいる。

吉井派の作風は、互の目が規則的に連れるところが見どころであり、また映りは備前物の中でも独特で、刃文の形がそのまま影になったように見えるものである。中でも古吉井はこれらの特徴に加え、さらに沸がつき、刃中に砂流し・金筋が働くところが見どころであり、さらに帽子が掃き掛けるところもある。

(参考文献)『日本古刀史』『重要刀剣図譜』『日本刀大鑑』

### 古某の所在地および時代区分





木曾路 編

今日の俺の行き先は岐阜県中津川市の刀剣商、お刀処恵那秋水会...

籠峠までの標高差二〇〇ほど、還暦過ぎの俺には嬉しいイージーコース...

小雨だった雨が次第に強くなり土砂降りに。沢の水が大量に路面にはみ出し、横切っている...

氏(海上自衛隊員だった若き日に、広島県呉の駐屯地に勤務...

店内に入ると、まず高い天井に気づく。件の抜刀術の道場も視野に入れていたという店内は商品が綺麗に整理され、刀剣類・刀装具も見やすい配慮となっている...

五平餅をさげし、男子の割には整理が行き届いており、だらしない俺には身につまされる。そして岩村歴史資料館で展示される予定の、氏の絞革の資料も見せていただき嬉しい限り。

一方、俺は木曾路をなめていた。松原氏が設定してくれたコースは馬籠宿陣馬下から馬籠峠までの茶屋にて松原正勝さん(右)と筆者



馬籠峠の茶屋にて松原正勝さん(右)と筆者



馬籠峠は街道の最難所

松原正勝

私のふるさとには日本の中央部、岐阜県中津川市で、隣の信州まで車で十五分くらいで行けます...

琴線に触れるからだと思えます。わが家の前を中山道が通っており、江戸時代から馬籠(馬と馬子)を泊める宿を経営し、戦前まで続けていました...

中山道のうち、江戸方の鷺川宿から馬籠までの十一宿を木曾街道と言ひ、とりわけ険阻な山坂でありました...

濃国の分水嶺・馬籠峠で、標高は八〇〇メートル、八・四キロの長距離です。冬の道中は殊の外難儀だったと聞いており、明治末年ごろまでは山賊や熊が出たので、庶民や僧侶までも脇指を差して越えなくてはならぬ。



中山道に面した店舗兼住宅

NEWS & TOPICS

三上貞直前会長が「全日本刀匠会のあゆみ」を講演

九月十二日、岡山大学で開催された日本鉄鋼協会「鉄の技術と歴史」研究フォーラムにおいて、三上貞直刀匠(全日本刀匠会前会長)が「全日本刀匠会のあゆみ」と題し、昭和五十年に設立された同会の前史から今日に至る長い歴史を講演された。

刀匠会結成の動きは、作刀材料の払底という切実な問題に触発されて始まる。自家製鋼研究会が四回にわたって開催されるとともに、新玉鋼などの新材料も模索される一方、四十八年に政財界のメンバーによる「新作刀を守る会」が発会、財団法人日本美術刀剣保存協会(当時、本間順治会長)が中心となってたらの復活操業を構想するところとなる...

刀匠会は日刀保に所属しつつも、自助努力をもって新たな地平を切り開いてきたと言える。「お村正をはじめとした著名な刀匠にも論及している。復刊が公になるとすぐにSNSで反応があり、刀剣乱舞関連のサイトがツイートして以来、反響は増大。一時は同社のオンラインショップに『広辞苑』に次ぐ最大級の注文が殺到、さらに発売からわずか三日で重版が決定したという。利用者は普段の岩波新書購入層に比べ、圧倒的に女性が多いこともあり、岩波新書編集部も「刀剣乱舞がなかったら復刊はなかったでしょう」とコメントしている。

十月四日から六日まで東京・新橋の東京美術倶楽部において「二〇一九東美アートフェア」が開催された。東美アートフェアは、東京美術商協同組合(以下、東美)の加盟四八五のうち一〇二の美術商が一堂に会し、自慢の逸品を披露する毎年恒例の展示販売会。古美術・近代美術・現代美術・茶道具・工芸など多彩なジャンルの芸術が身近で見られる機会として多くの来場者を楽しませている。東美の会員は厳しい審査を通過した美術商のみ。つまり、プロ中のプロからお墨付きを受けた美術商のみが集まっていることも、東美アートフェアの価値を表すポイントである。近年では来場者を楽しませるプログラムとしてトークショーや体験イベントなども充実してきており、今年も「はじめての刀剣〜本阿彌家が伝える所作体験〜」と題して日本刀鑑賞の作法を学ぶイベントが行われた。講師には人間国宝である研師・本阿彌光洲氏の次男・雅夫氏と三男・毅氏を招き、株式会社日本刀剣・伊波賢一氏の軽快な進行のもと、和やかな雰囲気の中で刀剣文化への関心の高まりを反映してか、予約制の会場は事前申し込みの時点で三十名の枠は満員となった。ほとんどが初めて刀剣を鑑賞する美術愛好家の方々が主だったが、真剣に鑑賞の作法を学び、自らが刀を扱う姿を記念に撮影してもらうなど楽しんでいった。

昭和十四年初版発行の岩波新書「本間順治著『日本刀』」が復刊され、話題となっている。本書は今回が第六刷とのことだが、前回の第五刷は昭和十八年の発行で、実に七十六年ぶりの復刊となる。今年六月に刊行開始した『岩波新書クラシックス』の一環で、過去の名著を毎月一冊ずつ限定復刊するもの。第一弾の『戦争と気象』も、昭和十九年の初版以来という。当時、文部省宗教局保存課に所属し、日本刀の研究では既に第一人者であった著者が鑑賞を傾け、平易明快に説いた書。日本刀の歴史・特色・鍛錬・研磨・鑑定・取り扱い・保存まで多岐にわたる解説。国宝・名物、名刀正宗や妖刀



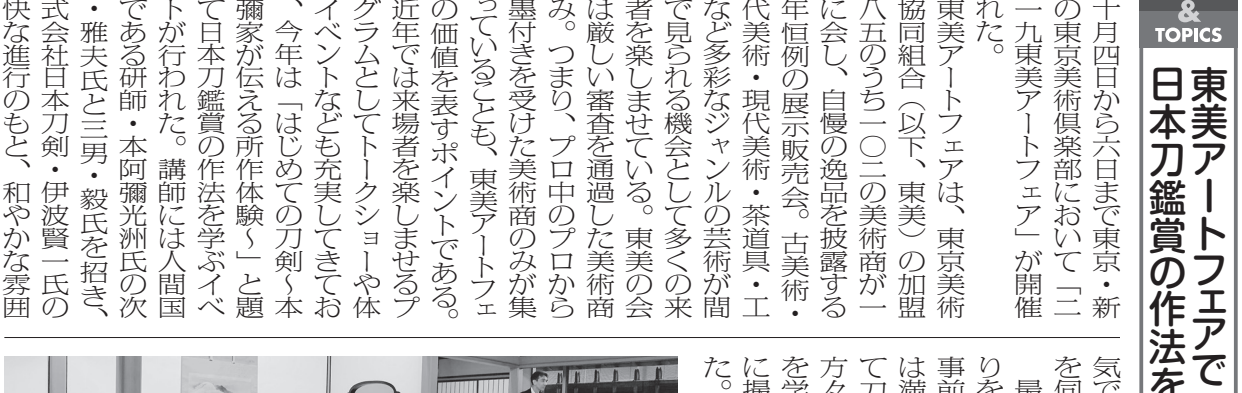
帯以外は全て初版と同じ日本刀

NEWS & TOPICS

東美アートフェアで日本刀鑑賞の作法を学ぶ

気て実際の作品を前に鑑賞の作法を学んだ。最近の刀剣文化への関心の高まりを反映してか、予約制の会場は事前申し込みの時点で三十名の枠は満員となった。ほとんどが初めて刀剣を鑑賞する美術愛好家の方々が主だったが、真剣に鑑賞の作法を学び、自らが刀を扱う姿を記念に撮影してもらうなど楽しんでいった。

「はじめての刀剣〜本阿彌家が伝える所作体験〜」の参加風景



「はじめての刀剣〜本阿彌家が伝える所作体験〜」の参加風景

NEWS & TOPICS

三上刀匠の講演に約100名が耳を傾けた

連産業の技術と歴史を探る」をテーマとし、合わせて七本の講演があった。(土子民夫)



三上刀匠の講演に約100名が耳を傾けた

# 刀 剣 界

## ブック・レビュー BOOK REVIEW

### 百万石を築いた領主三代の実像に迫る

『利家・利長・利常―前田三代の人と政治』

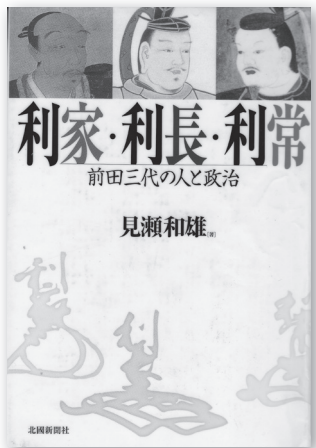
見瀬和雄著 北国新聞社 定価一、九四四円(税込)

「加賀百万石」―何とも絢爛豪華な響き。刀剣や金工を専門とするわれわれには、何かと縁が深い。三代前田利常の時に後藤頼兼を招き、加賀金工を指導させて金工文化が開花。刀工も越中守高平や兼若、加州清光、陀羅尼勝国、そして人間国宝・隅谷正峯師と、刀剣の歴史に名を遺した名工・優工を輩出したのが加賀である。

では、加賀前田家とはどのような家なのか。家康・秀吉に仕え江戸時代は新徳川の大名として続いたということは周知のことではあるが、それ以上のこととなると怪しくなる人は多いのではないだろうか。筆者も例外ではない。

これまでに、家老の今枝民部が主君の差料に相応しいかどうかが、京都の本阿弥光山に刀の鑑定を依頼した旨、史料が付帯する法城寺無銘の刀や、やはり家老の横山氏の家紋入りの金具で装われた心永盛光の脇差と出会った際に、いろいろ調べた経験がある。が、前田利家やその子供たちの話となると、「あまりよく知らない」というのが正直なところである。

実は、加州長次の立派な雑刀について調べる機会を得た。前田利常が、後見する孫綱紀の藩政十年目の承応三年(一六五四)、兄利長を祀る高岡瑞龍寺に兼若・家重ら領内二十二工の刀を奉納し、綱紀の武運長久と家運隆盛を祈って



「何とまあ欲の深いこと」と言われて呆れられたらしいが、この利常が、しかし、なかなかの人である。彼は加賀藩主としては唯一人質となった経

験のある人だという。切れ者なのに(いや、切れ者故に)暗黒を装って平素から鼻毛を長く伸ばしていたという面白さ。こんなやり手の殿に年貢を搾り取られる側は…たまたまのものではない。

利常はなぜ孫の後見をしているのか。なぜ兄利長の菩提寺瑞龍寺に刀を奉納したのか。兄弟の生涯はどんなだったのか。何も知らない。それで最寄りの図書館で手にしたのが、この本であった。

この本は前田家三代、利家・利常・利長の人物、そして業績について述べた書である。利家は「かぶき者」威勢のいい感じがあるが、それゆえに数々の試練があった。そして比較山姥討ちを執行した信長同様、一向一揆への苛烈な処罰(磔や釜煎りを行なったらしい)を執行した(武生小丸城跡出土の文字瓦がある)。そして賤ヶ岳の戦いで柴田勝家が敗れた後の身の振り方(要するに秀吉旗下の有力武将として生まれ変わった)。その後の、北陸における領主としての日々…。草創期の苦勞がわかりやすく記されている。

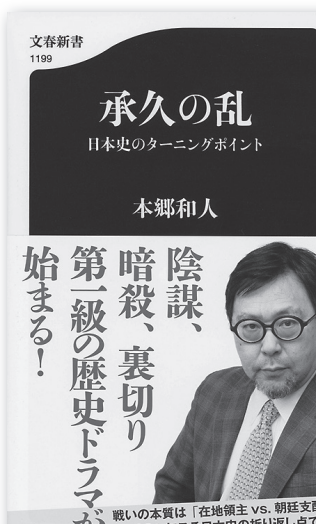
利常と弟利常の時代は、徳川氏とどう折り合いをつけて生き残るかが問題であった。利常とは別の意味で、苦難続きであった。老獪な家康に無理難題を突き付けられる利常は、どうやって耐え忍んだのか。三代利常も積極的に徳川氏の普請にお金を出し、親徳川として態度を明確にしていく。だが、その結果、深刻な財政難という厳しい現実が待っていた。

利常はどうしたか…。彼は実にいいところに目を付けた(重臣二人には「何とまあ欲の深いこと」と言われて呆れられたらしいが)。この利常が、しかし、なかなかの人である。彼は加賀藩主としては唯一人質となった経

験のある人だという。切れ者なのに(いや、切れ者故に)暗黒を装って平素から鼻毛を長く伸ばしていたという面白さ。こんなやり手の殿に年貢を搾り取られる側は…たまたまのものではない。

利常はなぜ孫の後見をしているのか。なぜ兄利長の菩提寺瑞龍寺に刀を奉納したのか。兄弟の生涯はどんなだったのか。何も知らない。それで最寄りの図書館で手にしたのが、この本であった。

この本は前田家三代、利家・利常・利長の人物、そして業績について述べた書である。利家は「かぶき者」威勢のいい感じがあるが、それゆえに数々の試練があった。そして比較山姥討ちを執行した信長同様、一向一揆への苛烈な処罰(磔や釜煎りを行なったらしい)を執行した(武生小丸城跡出土の文字瓦がある)。そして賤ヶ岳の戦いで柴田勝家が敗れた後の身の振り方(要するに秀吉旗下の有力武将として生まれ変わった)。その後の、北陸における領主としての日々…。草創期の苦勞がわかりやすく記されている。



「承久の乱」日本史のターニングポイント。本郷和人著。暗謀、陰謀、暗殺、裏切り。第級の歴史ドラマが始まる!

### 後鳥羽上皇vs「北条義時とその仲間たち」

『承久の乱―日本史のターニングポイント』

本郷和人著 文春新書 定価(本体八二〇円+税)

前々号に続いて、本郷和人先生の本書です。この本は、著者が鎌倉時代を専門とする研究者であり、承久の乱は資料が少ない中、この時代をきちんと理解していないと書けないそうです。何しろ「あどがき」で、構想十年、鎌倉幕府とは何か、をずっと考え続けていたからこそ書けた本だ、とまで言い切っています。

ということで『承久の乱』を読みました。

最初に作者が言うのは、鎌倉時代に「幕府」というきちんとした政治システムが確立していたわけではなかったという点です。源頼朝を棟梁と仰ぎ、そこに結果集まることで自分たちの利益、特に土地の保障(安堵)を得る。それが「御恩」であり、報いるために頼朝の命令の下に闘うことが「奉公」です。それを受け入れた武士たちは、頼朝の子分として「御家人」と呼ばれました。

つまり鎌倉幕府とは、一言で言えば、保証人・頼朝と主従契約を結んだ仲間たちが、東国に築き上げた安全保障体制なのです。あくまで東国です。朝廷にはほとんど影響はありませんでした。しかし、頼朝が亡くなると、幕府に大きな政変がありました。

頼朝の死後、二代将軍となったのは、二十一歳の嫡男源頼朝でした。これまでの頼朝の評価は、非常に低いものでした。経験不足で未熟な将

軍だったために、御家人の離反を招き、最後には幽閉され、政權から排除されてしまつたのです。

しかしながら、これは「吾妻鏡」に書かれていることなのです。同書は北条氏支配を正当化するための歴史書です。つまり、北条氏が実権を握っていく歴史を正当化するために、頼朝は暗君として描かれなければならなかったのです。

何しろ頼朝が将軍になってから、北条政子の父親である北条時政が、梶原景時・比企氏・畠山重忠といったライバルたちを次々に謀略で滅ぼし、將軍頼朝までも修善寺に幽閉してしまつた。

その時政に従い、血なまぐさい政争に明け暮れながら、最後には父を追いつけた北条義時。血で血を洗うサバイバルの最終勝者となった義時こそ、知謀と武力で勝り上がった「鎌倉の王」であると、東国武士の誰もが認めたはずなのです。

頼朝が東国の武士団を率い、平家を打ち破って「武士による、武士のための政治を実現する場」として、鎌倉幕府は生まれました。その幕府内の権力闘争に勝利した義時は、頼朝の真の後継者として、鎌倉幕府は「頼朝とその仲間たち」から「頼朝とその仲間たち」による政權になったのです。

三代将軍は、頼朝の弟である実朝が継承します。実朝は十二歳でした。ここから、朝廷、すなわち後鳥羽上皇が登場します。

後鳥羽上皇は、学問好きの実朝のために、都の一流の知識人を家庭教師にすることを認めます。優れた歌人でもあった実朝

は、「新古今和歌集」の選者である超一流の歌人・藤原定家に歌を送り、定家が添削をして返す形で個人レッスンが続けました。また、学問的な能力に秀でていた下級貴族・源仲章を鎌倉に送り込みます。彼は実朝の学問の師になったばかりか、幕府内の政治にも関与しました。

後鳥羽上皇は実朝の婚姻関係にも深く関与していきます。自身の母親の実家である坊門家の信子を、実朝の正室にすることを認めたのです。さらに官位です。実朝は驚くべきスピードで官位での地位を上げていき、ついには父頼朝をしのいで右大臣にまで昇っています。

後鳥羽上皇は実朝に好条件を与え、実朝が後鳥羽上皇に積極的に仕えることこそ、幕府と朝廷の正しいあり方だと考えていました。

後鳥羽上皇にしてみると、鎌倉武士のトップを自分の考える秩序の中に完全に押し込んだという認識があったはずなのです。しかし、そこに落とし穴がありました。

実朝は、朝廷に接近することによるデメリットを向けていませんでした。それは、在地領主である御家人たちとの間にギャップが生まれつつあります。

承久の乱が起きた根本的な原因は、ここにあります。詳しくは本書を読んでいただくしかないのですが、後鳥羽上皇の国家観は、全ての頂点には皇家(天皇)が存在します。それに対して、頼朝や義時が考えていたのは「在地領主による、在地領主のための政權」です。朝廷を否定するわけではありませんが、東国には東国のやり方がある、という主張で、交わるわけがありません。

後鳥羽上皇の主張を「権門体

制論」、義時側の主張を「東国国家論」と言うのですが、繰り返すしにりますが、本書を読んでいただければと思います。

「これでいいのか」という危機意識は、義時に代表される御家人たちの間に広がっていき、実朝暗殺という衝撃的な形で現実のものとなります。

実朝の暗殺という事態を知った後鳥羽上皇は「義時を討て」という命令を各地の御家人たちに与えました。後鳥羽上皇と「義時とその仲間たち」との間で承久の乱が起こります。結果は「義時とその仲間たち」の勝利となります。東国の武士たちは生き残りを受けつた戦いに、京都に攻めていきました。後鳥羽上皇側の武士には東国武士たちのような覚悟もなく、また、兵の動員数も幕府側二万七千人以上、後鳥羽上皇側一千七百人と、義時方の圧勝でした。

これにより「義時とその仲間たち」は、本当に鎌倉幕府となります。つまり、後鳥羽上皇を隠岐に配流するまで、むき出しの暴力を見せることで朝廷の人事に介入していきます。

承久の乱以後、日本という国のメインプレイヤーが、貴族から武士という在地領主へと変わっていったのです。

小生は本書を読んだことで、今までよくわからなかった鎌倉時代のことが少し理解できたような気がします。あなたもぜひ読んでみてください。(持田真宏)

古銭・切手・刀剣 売買 評価 鑑定  
株城南堂古美術店  
代表  
田中勝憲

〒153-10051  
東京都目黒区上目黒四-1-110  
TEL 03-3711-6776  
03-3711-6776  
FAX 03-3711-6776



催事情報

■上田市立博物館

〒386-0026 長野県上田市二の丸3-3 上田城跡内 ☎0268-22-1274  
https://www.city.ueda.nagano.jp/hakubutukan/tanoshimu/hakubutsukan/uedashi.html

開館90周年記念特別展「武士の魂—上田ゆかりの武具と刀剣」

甲冑、弓矢そして刀剣…。日本社会を長らく支配し続けた武士階級は、基本的に軍事をつかさどる存在でした。武士にとっての価値観は、古代以来「弓馬の道」とうたわれ、南北朝や戦国の動乱期を通じて、甲冑や刀剣の形態もさまざまに変化してゆきます。武士の戦装束である「武具」は、生死に関わる実用の道具であるのと同時に威信財としての機能も持ち続けたのでした。

当館所蔵の武具類は、上田藩主所用の甲冑や弓矢、藩のお抱え刀鍛冶が鍛えた刀剣、陣羽織などを中心としていますが、当地域の方が収集・寄贈されたものなど、いずれも上田にゆかりの深いものばかりです。本展を通じて、上田の地には多くの貴重な文化財があるということ、そしてそれらを現代まで長く伝えてきた人々の思いを感じ取っていただくと幸いです。  
会期：10月26日(土)～12月1日(日)



■熊本県立美術館

〒860-0008 熊本市中央区二の丸2 ☎096-352-2111  
https://www.museum.pref.kumamoto.jp/

熊本城大天守外観復旧記念「熊本城と武の世界」

平成28年の熊本地震により被災した熊本城大天守の外観修理完成を記念して、熊本城主・加藤家、細川家の「武」にまつわる歴史資料や美術工芸品を、主に熊本城との関わりに沿って紹介します。

加藤清正によって築かれた熊本城は、加藤家改易後に熊本藩主となった細川忠利によって整備され、明治維新を迎えるまで細川家の居城として用いられました。難攻不落の城造りを目指し、度重なる改修によって強化された熊本城の防衛力は、明治10年(1877)に勃発した西南戦争で、50余日に及ぶ過酷な籠城戦を耐え抜いたことにより、凶らずも証明されることとなります。

本展では、桃山時代の築城から、江戸時代の改修を経て、明治時代に至る熊本城の歴史と、それを取り巻く「武」の世界を、加藤家・細川家ゆかりの甲冑や刀剣と、城絵図や古文書をはじめとした歴史資料からたどります。また、菊地地域で活動した延寿派の刀剣と、肥後の豪刀・同田貫、肥後鐔をはじめとした刀装具の美をご紹介します。

会期：10月26日(土)～12月15日(日)



会場によって休館日が異なります。事前に確認の上、お出かけください。

■刀剣博物館

〒130-0015 東京都墨田区横綱1-12-9 ☎03-6284-1000  
https://www.touken.or.jp/museum/

日本刀の見方 パートII 地鉄

この度の展示では原点に立ち返り、日本刀鑑賞の基礎たる点にスポットを当てることにいたしました。

近年、増えている若い刀剣愛好家からの声もあり、日本刀はどのように見ればよいのか、どこが見所なのかをわかりやすく示し、日本刀の魅力を存分に楽しんでいただこうと思います。

そこで「日本刀の見方」と題し「姿」「地鉄」「刃文」それぞれに焦点を当て、全3回に分けて日本刀鑑賞のポイントを解説するシリーズ展示を企画しました。本展覧会では(公財)日本美術刀剣保存協会の所蔵品を中心に各時代の名刀や、彩りを添える刀装・刀装具を展示いたします。初心者も玄人も共に肩を並べて心置きなく、名品をご賞観ください。

会期：10月12日(土)～12月23日(月)



■春日大社国宝殿

〒630-8212 奈良市春日野町160 ☎0742-22-7788  
http://www.kasugataisha.or.jp/

最古の日本刀の世界 安綱・古伯耆展

平安時代に伯耆国(現在の鳥取県中・西部地域)に現れた鬼才、安綱とその一門。武家社会でその太刀は尊ばれ、秘蔵され、そして神へと捧げられました。しかしその門流はいつしか途絶え、その作品は多くは残っていません。平成29年に春日大社で存在が確認された古伯耆の太刀もまた、中世の有力武将の奉納と伝わってきました。この話題を呼んだ太刀の発見を契機に、春日大社では、安綱をはじめ真守、安家、有綱など古伯耆の名刀の原像を調査してきました。

本展は国宝・重要文化財に指定された安綱・古伯耆のほぼすべての作品が、900年の時空を超えて、春日大社国宝殿に集結する画期的な展覧会となります。また日本刀は、正倉院宝物などに見られる直刀から、刀工の祖とされる大和国(奈良県)の天國が作ったとされる小島造(鋒刃刀造)や毛抜形太刀といわれる様式を経て、平安時代中期から後期にかけて美しい反りを持つ日本刀が成立しました。こうした日本刀が成立する過程で安綱は、京都の三条宗近・古備前刀工と並んで、最古級の刀匠とされていることから、国学院大学所蔵の直刀(6世紀)から、春日大社が所蔵する鋒刃刀造の国宝「黒漆平文飾剣」や国宝「金地螺鈿毛抜形太刀」、大山祇神社(愛媛県)所蔵の「古神宝太刀」をはじめ、日本刀の発祥の地とされる大和、山城、備前の名刀を併せて展示し、日本刀成立の謎に迫ります。なお、今回展示される作品には、素晴らしい拵(太刀拵)が付いているものが多く、刀身とともに拵(外装)も併せ展示します。

また、一説に安綱は奈良市杉ノ川町の出身で、刀剣に反りをつけた最初の刀工という伝承が残されています。こうした説話が生まれる背景など、文化的側面からも安綱の謎、魅力にせまる画期的な展示となります。

会期：12月28日(土)～3月1日(日)

**名古屋で来年開館 東建社長意気込み**

刀剣ワールドは、同社の一棟の一、二階の一部と、二十八階建て高層ビルに隣接する七階建ての北館にシヨン「米タワヒルズ」に入る。展示スペースの確保は、

東建「ホリシヨン(名古屋)」は来年六月、名古屋・栄に博物館「名古屋刀剣ワールド」を開館し、国宝の短刀「有楽兼光」を含む約二百の日本刀を展示する。左右田社長兼会長は「刀長、兼光、家康の三傑をはじめ武將に縁深い名古屋で、歴史に敬意を込めて観光客の心を魅了したい」と意気込みを語った。(白野和紀)

床面積は約三千二百平方メートルで、国宝、重要文化財などの刀に加え、甲冑五十丁や、絵巻に刀剣が登場する浮世草子や、刀装具も展示する。ミュージアムショップも設ける。

有楽兼光は、鎌倉時代末期から南北朝時代の京都の刀工・兼光の作で、刀身の長は約七・七センチ。織田信長が茶室で茶室で一時所持していた。最近では埼玉の個人が所有していたのを同社が入手し、博物館で展示する。

東建「名古屋」は、多額の施設整備費や運営経費が必要だが、博物館で収益を得るのには、地域の文化、観光振興への貢献の色彩が強い事業になる。入場料は千円の予定。左右田氏は「刀剣がそれぞれ持っている物語と魅力を味わってほしい」と語る。インターネットでの情報公開も予定されている。

【中日新聞】令和元年10月29日

**NEWS & TOPICS**

**玉鋼を刀匠が鍛えた32万円のバター**

十五世紀にたたら製鉄を開始し、約四百年にわたり操業、現在も屈指の山林地主である田部家が経営する株式会社田部(鳥根県雲南市吉田町)は、昨年約百年ぶりにたたら製鉄を再開、これを契機に、鳥根県出雲地方の重要な資源である「たたら」を起点とした地域づくり「たたら」の里づくりプロジェクトを推進して、話題となっている。

同プロジェクトは、①環境、②名品、③食品、④観光・文化の四つのプロダクション事業で構成され、産官学連携でたたら製鉄の文化発信に取り組んでいる。

田部の本拠地である吉田町には、奥出雲前綿屋鐵堂がオープン、旗艦店として、復活操業で得た鋳から作った包丁やゴルフパターなど十二種類の商品が販売されている。ちなみに、バターは地元の小林俊司刀匠が折り返し鍛錬した玉鋼をフェイスインサート。ヘッド部分は最高級ステンレスSU316のインゴット削り出し、ハンドミルで鱗模様を一つ一つ刻み込んだ一品である。

ピン型とマレット型の二タイプがあり、カラーはシルバー、ゴールド、ブラックの三色。定価は三十二万四千元。

刀匠が鍛えた玉鋼を使用

日本刀の  
名品・名刀を販売

店主 小暮 昇一

〒529-1131  
滋賀県愛知郡愛荘町香掛80-1  
TEL 074-911-6221  
074-911-6271  
074-911-6277  
074-911-6277  
074-911-6277  
074-911-6277  
074-911-6277  
http://www.goushuya-nihontou.com

アオバ企画(株)

高橋 一

〒130-0012  
墨田区大平四-1-19  
TEL 03-3611-1111  
03-3611-1111  
03-3611-1111  
03-3611-1111  
03-3611-1111  
03-3611-1111  
aobakk@p18.so-net.ne.jp

刀剣・小道具・甲冑武具

目白 飯田高遠堂

代表取締役 飯田慶雄

〒161-0033  
東京都新宿区下落合3-17-33  
TEL 03-3951-3312  
FAX 03-3951-3615  
http://www.iidakoendo.com

(株)美術刀剣松本

松本 富夫 義行

〒278-0043 千葉県野田市新水199-1  
TEL 04-7122-1122  
FAX 04-7122-1950  
www.touken-matsumoto.jp

美術日本刀・鐔・小道具・甲冑

日本の伝統文化を彩る  
JAPAN SWORD CO., LTD.

(株)日本刀剣

伊波賢一 Ken-ichi Inami

〒105-0001 東京都港区虎ノ門3-8-1  
TEL 03-3434-4321  
FAX 03-3434-4324